

ゼロ災運動で現場力ヨシ!

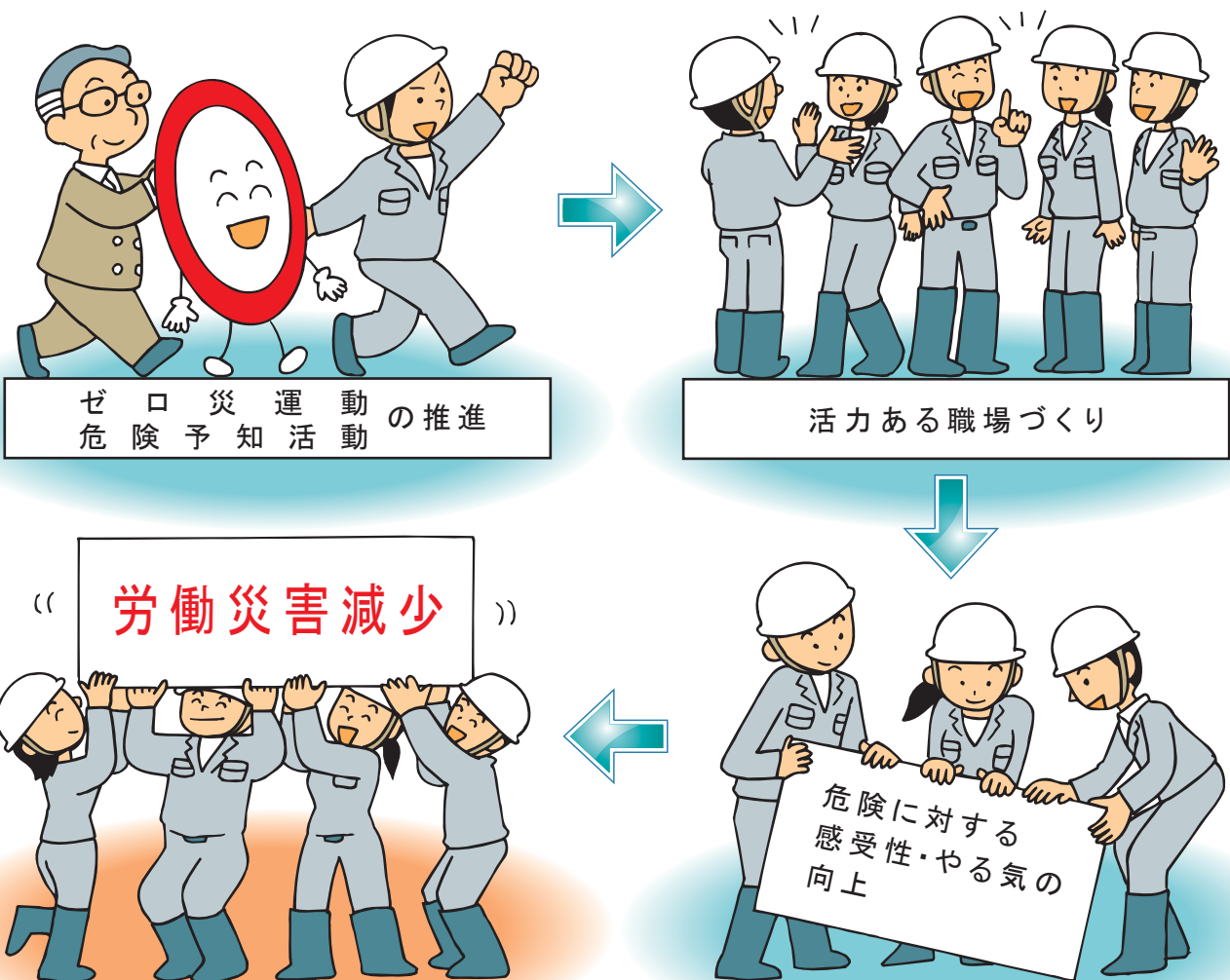
わが国の労働災害は長期的に減少傾向にあるとはいえ、労災保険新規受給者数では、年間55万人にも及んでおり、ここ数年減少のきざしが見られません。また、一度に多数の方々が被災する重大災害も多発している状況にあります。

こうした背景には、①近年の生産工程の多様化・複雑化や新たな機械設備、化学物質の導入などによって、事業場内の危険が多様化していることへの対応が十分でないこと、②就業形態の多様化や非正規雇用労働者の増加により、従業員への教育訓練が不足したり、必要な安全衛生上の連絡調整・コミュニケーションを欠く場合があること、③これまで現場の安全衛生を支えてきた世代が第一線を退くことに伴い、安全衛生に関するノウハウの伝承が十分でないことなどが考えられます。

これらのことに対処していくためには、職場における労働災害防止のための小集団活動の活性化やリスクアセスメントへの取り組みの強化により、現場で発生する危険要因などの諸問題を主体的に発見し、これを解決する力である「現場力」の強化を図っていくことが必要です。

とりわけ、働く人の立場に立って全員参加で職場の危険や問題点を考え、分かり合って、解決していく「ゼロ災運動」の導入が現場力強化の第一歩です。

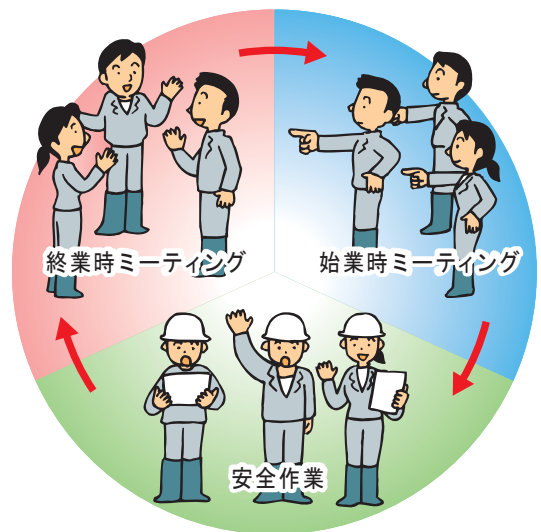
ゼロ災運動の積極的な展開によって、現場力の強化を図りましょう。



1

チームミーティングを活発化させよう

一方的な指示、命令、伝達、指導のみの形式的なミーティングでは、進んで行動しようという意欲につながりません。チームミーティングは「話し合い、考え合い、分かり合う」というチームの合意の中から自ら進んで考え、行動するやる気の職場を育てます。ゼロ災運動では、日々の仕事の流れの中に積極的に安全衛生活動を取り入れ、管理監督者やリーダーが作業員との間で、日常的に双方向の話し合いを活発化させることを進めています。このことにより職場のコミュニケーションが向上し、チームワークが高まり職場の雰囲気も明るくなります。



▶ 一日の始まりは始業時ミーティングから

朝礼や始業時ミーティングを活用して、管理監督者やリーダーが作業員への健康観察、健康問いかけ、作業指示や割り当てなどを行った後、作業メンバーとの間で、危険予知を含めた双方向の話し合いを行いましょう。

▶ 作業中も短時間ミーティングを行おう

管理監督者やリーダーは、作業中に作業内容の変更や突発的な作業が入った場合などには、作業員への適切な作業指示と併せ復唱を取り入れることにより、危険の見落としをなくしましょう。また、作業メンバーとの間で、危険予知を含む短時間ミーティングを行い、危険感受性を高めるとともに、一人ひとりのやる気につなげましょう。

▶ 一日の終わりも終業時ミーティングで締めくくろう

終業時には4S（整理・整頓・清掃・清潔）の確認、終礼を行ってその日の作業の状況、朝礼で決めたチーム行動目標が実行できたか、作業指示に問題はなかったかなど、管理監督者やリーダーが作業員とともに双方向の話し合いを行って締めくくります。

2

危険予知 (KY) 活動を実践しよう

作業にかかる前、ミーティングでその作業にひそむ危険を短時間で話し合い「これはあぶないなあ」と危険に気づきこれに対する対策を決め、行動目標を立て、一人ひとりが実践する、さらに、作業の要所所で指差し呼称する、このプロセスが危険予知 (KY) 活動です。KY活動には、① 危険への「感受性」を鋭くする、② 要所所で「集中力」を高める、③ 安全衛生推進への「やる気」を強めるという効果があります。しかしながら、例えば「無理な姿勢なので腰を痛める」といった抽象的な表現より「前かがみの姿勢で荷を抱えて腰を痛める」のように具体的に表現することが重要です。そのためには、正しく危険要因を見つけ出すための基本訓練である危険予知訓練 (KYT) を繰り返し行うことが大切です。

KYTの体験学習は、作業にひそむ危険を理解しやすくするために、初期の段階では通常イラストシートを使って行います。

KYTは次の4つのステップ(4ラウンド(R)法)を基本に進めます。

- | | |
|------------|---------------|
| 第1R (現状把握) | どんな危険がひそんでいるか |
| 第2R (本質追究) | これが危険のポイントだ |
| 第3R (対策樹立) | あなたならどうする |
| 第4R (目標設定) | 私たちはこうする |

導入 整列・番号、挨拶、健康確認

第1R(現状把握) どんな危険がひそんでいるか



状況
あなたは、トラックのコンテナの中に入っているダンボール25箱(1箱:30cm×45cm×35cm 重さ10kg)をプラットフォーム上の台車に載せかえている。

コンテナの端に積んだダンボールを手前に強く引き出すようにして、コンテナの角で手を切る。
繰り返し前かがみの姿勢でダンボールを載せかえたので腰を痛める。
ダンボールが長いので、手前に引きだし抱えながら載せかえようと後ずさりして、後ろの台車につまづき転ぶ。



第2R(本質追究) これが危険のポイントだ

- 特に重要な危険に○印
- さらにみんなの合意でしぼりこんで「危険のポイント」に○印とアンダーラインを波線でひく

- 1 コンテナの端に積んだダンボールを手前に強く引きだそうとして、コンテナの角で手を切る。
- 2 ダンボールが長いので、手前に引きだし抱えながら載せかえようと後ずさりして、後ろの台車につまづき転ぶ。
- 3 繰り返し前かがみの姿勢でダンボールを載せかえたので腰を痛める。



第3R(対策樹立) あなたならどうする

●アイデアをどんどん出し合う



第4R(目標設定) 私たちはこうする

●対策をみんなの合意でしぼり込む



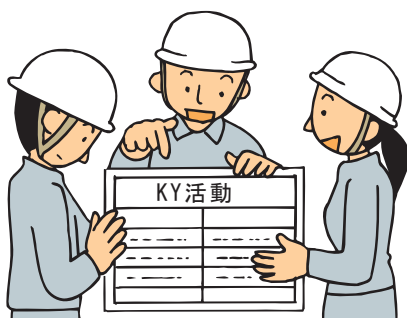
確認 ●指差し呼称項目を決める



3 KY活動とリスクアセスメントを一体として安全衛生活動を進めよう

職場の安全衛生確保には、安全衛生管理の徹底がまず基本にあることはいうまでもありません。特に昨今、安全衛生を組織的、継続的に改善していくための安全衛生の仕組みづくりとして労働安全衛生マネジメントシステム(OSHMS)を導入する事業場が増えています。特にOSHMSの中核であるリスクアセスメントにより、優先的に大きな危険の要因を発見し設備等の安全化対策を進めていくことによって安全衛生水準の向上を図ることが大切です。

しかしながら、今すぐに改善できない危険や人間の行動に起因するリスクに対しては、KY活動等日常の安全衛生活動で災害を防止していくこととなります。また、日常的にKY活動を行う職場では、常日頃から危険(ハザードやリスク)の発見が訓練され危険感受性が高まることから、リスクアセスメントの「危険性又は有害性の特定」がスムーズに行えます。つまり、リスクアセスメントもKY活動も両者の利点をうまく活用して、一体として安全衛生活動を進めることが重要です。



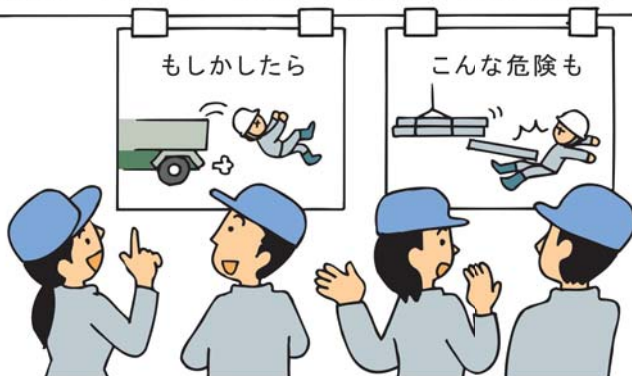
4 指差し呼称を実践しよう

指差し呼称は、作業行動の要所要所で、自分の確認すべきことを「〇〇ヨシ!」と、対象を腕を伸ばしてしっかり指差し、はっきりした声で呼称して確認することによって作業を安全に、誤りなく進めていくために行う確認手法です。作業前のKY活動で話し合った危険のポイントでしっかり指差し呼称することによってより実践的な活動となります。



5 ヒヤリ・ハット活動を進めよう

仮想・予想ヒヤリハット提案まで幅を広げる



ヒヤリ・ハット活動は、職場のメンバーでみんなが経験したヒヤリ・ハット・キガカリをどんどん出し合い、危険情報を共有することによって危険感受性を高めることができる活動です。ヒヤリ・ハット活動で出された重要な危険情報は、作業指示に盛り込むことが必要です。また、ヒヤリの起こる一歩手前の状況をイラストシートに描くこと等によってKY活動の題材として活用することができます。

6 4S活動を推進しよう

4Sとは、整理・整頓・清掃・清潔の頭文字を略称したもので、安全衛生推進の基本として、古くから行われている活動です。しかし、職場の4Sを築き、望ましい4Sの状態を日々維持していくことは非常に難しい課題です。この4Sに関わる職場の問題点についてもチームミーティングを活用して具体的に解決を図っていくことが重要です。



お問い合わせは